
旅路

フグ太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

旅路

【Nコード】

N7961T

【作者名】

フグ太郎

【あらすじ】

すべての旅には準備がある。僕の旅は不思議だったけど、死に対する恐怖は無くなった。旅はいいものだ、本当にそう思う。こちらの世界とあちらの世界、その旅路は決して悪くないもんだ。

序章

序章

本当に気持ちのいい朝だった。

ひと月に一度かあるかないかの格別の朝だ。雲ひとつなく、適度な風と適度な波の音がいつもの目覚まし時計より1時間も早く目と耳に呼びかけた。

窓を開けると海面が宝石のようにキラキラと輝き、遥か彼方に漁船か何かの船が一艘見える。

海沿いを仲の良さそうな老夫婦が犬の散歩をしている。

深く帽子を被り、少し早いピッチで走るランナーがいる。

通勤なのか、海沿いでは似つかわしくないスーツ姿の男性が足早に歩いている。

それらは今現在、僕と同じ時間を生きているんだ。

しかしそれらはきつと旅の途中なのだろう・・・

それらは何処から生まれて何処に行くのか・・・

答えは人の数ほど無数にあって、それと同時に一つ一つのストーリーが隠されている。

本当に面白いものだ・・・

本当に切ないものなんだ・・・

きつといくつもの感情が入り混じり、波のような感動が押し寄せる。僕の旅は誰にも邪魔することはできない、僕も君の旅は邪魔できないのだから。

だから、だからもっと楽しもうじゃないか、これから来る未来がどんなに陰しくても、どんなに恐ろしくても。

きつとまた、会えるから・・・僕の旅がそうだったように。

鎌倉の海沿い134号線沿いのマンション。

ここに僕の住んでいる部屋がある。

築10年にも満たないどこか地中海を思わせるような作りのマンションで、僕の部屋は最上階の4階にあった。

鎌倉というのは観光産業で成り立っている場所だから、ある程度高さが制限が厳しく設定されていて、海沿いでは4階建てくらいが精一杯なのだ。

一般的なサラリーマンじゃ鎌倉の海沿いのマンションなんか高くてもちろん買うような代物ではない。

もちろんうちのマンションも会社役員や今時のIT系会社の成功者が別荘としてもっていたり、少しは名の知れたマンガ家や女優が住んでいた。

僕は会社役員でもなければ、成功者でもない。
もちろん名前なんて近所にすら知られてない。

時計を見ると午前8時15分あたりを指していた。

色の薄いブルーの短パンに白い長袖のシャツを着て、ベッドから起きて30分もしないうちに部屋を出ていた。

マンションの駐輪場に止めてあるビーチクルーザーでいつもの場所へと向かう。

『レイラ』という今時珍しい家族経営の小さなビンテージホテルだ。ビンテージなんて名前だけ聞けば格好もいいが、ボロボロのビンテージという意味だ。

というのも鎌倉の地で50年ほど前に現オーナー、浅見博之の叔父がはじめたホテルだからだ。

その小さなホテルの中、ロビーのすぐ横に喫茶コーナーがあって、

ダイニングコーナーとは別にある。

どちらかというと喫茶コーナーは地元の人が朝食と新聞を読みを利用する事が多い。

ボロボロといっても、置いてある家具や照明や全体的な作りはとても感じがいいし、常に建物全体の掃除が行き届いていた。

僕も体調がいい時はここで朝食を食べている。

「おはよう、いつもの頂戴」と、凜花に毎日の儀式のように言った。「よく毎回同じのばかり食べて飽きないね、たまには違うのにする？」

髪をポニーテールにし、チェックのエプロンを着た凜花が言う。

「いい、いつもので」

と言って、窓際のゆったりとしたソファに腰掛けた。

窓の外に目を向けると、もう桜が満開でピンクの花びらが一枚一枚輝き、その隙間からの光がとても綺麗だった。

凜花とは幼馴染でかれこれ20年以上は付き合いがある。

幼馴染といっても高校からは僕らは別々で、僕は高校から大学付属の学校でエレベーター式に大学まで進んだ。

凜花はすべて公立で、高校卒業後に好きな歌の道に進む為、東京の音楽専門学校に通った。

今でも鎌倉の小さなカフェやレストランに呼ばれては歌を披露することはあるが、卒業してからはすぐに実家のホテルを手伝っている。髪は背中くらいのロングで少しウェーブがかかっていて、いつもワンピースを好んで着ている。

目元はとてもクールなんだけど、唇は適度に厚く、髪型と顔の雰囲気がとてもマッチしていてすごく美人だ。

きつとブラウン管の向こうに写っていても、違和感なく美人だと思う。

実は凜花に対して、幼い頃から少なからず恋心があったのは事実だった。

しかし、現実からして幼馴染が結ばれるのは多くあるものではない。それは、相手の環境を知り尽くしていたり、長い時間を共にしていたり、なにより恋というより親友に近い感情が芽生えることなのだろうと思う。

しかし、僕は違った。

それも理屈抜きでの現実なのだからしょうがない。

といっても何人かの女性と恋愛もしたし、別れも経験した。

凜花だってそうだった様に。

でもどんな美人で性格の良い女性と付き合ったとしても、僕の心の中には常に凜花がいた。

交際相手の背後で片隅から時折、顔を出し、笑顔で笑っていた。

僕は臆病者だから、気持ちを伝える事ができないんじゃないんだ。

どんな地雷を踏むよりきつと、難しい事だった。

それは僕にしか分からなかったんだ・・・。

「ジュン、今日は調子良さそうね。」

とてもいい香りのアメリカンコーヒーを凜花がテーブルに置く。

「ああ、すごくいいよ。これなら波にも乗れるかもね」

「お父さん行ってるわよ、今日は波いいらしいじゃない。お母さんに仕事任せて早起きして行っちゃったよ・・・ほんと波ある時は仕事にならないよあの人」

「いいじゃん、波乗りは博之さんの一番の楽しみでしょ、波乗り取ったらたぶん仕事もろくにしなくなるぜきつと」

僕が言うと、納得という表情で凜花は頷いた。

博之は小学校の時からサーフィンを初め55歳になった今でも地元のローカルとして、色黒の肌に長髪をくくり、夏でも冬でも波さえあれば海に入る。

生粋の海人だ。

僕も最初はおじさんからサーフィンの基礎を教わった。

病気になるまでは、よく一緒に海に入っていたが、若さという武器

を持ってしても、おじさんの経験にはかなわない。

「はい、いつものどうぞ」すこし嫌味っぽく凜花が朝食を出す。きつと、数ある朝食メニューすべてに自信があるのだろう。

それなのにサンドイッチしか頼まない僕に対して少し不満があるように思える。

でも、凜花の作るチキンとアボガドのサンドイッチは本当に美味しかったし、何度食べても飽きなかった。

「ジュン、今日の夕方予定はある？」

「いや、いつもと同じだよ。何もない」

「6時からブルックリンでライブがあるんだけど、よかったら来ない？」

ブルックリンとは葉山にある小さなライブハウスで、総勢50人入れば満員電車みたいな所だ。

「そっか、今日は体調もいいし夕方まで体が持てば、行けると思う」

「ほんと!？」

「ああ。だけど前例があるし、100パーセントではないけれど」

「オッケー!今日は大丈夫!そんな気がするから平気よ」

凜花は満面の笑みで、僕が来ることを喜んでくれた。

今日のこの笑顔を見たら、どんな状況であれ、きつと這い蹲ってでも行くだろう。

いつも体調を気使って当日にしか誘っては来ない。

何度か這い蹲ってでも行けないくらい体調が悪い日があつて、約束を守れなかった事も実際にあったのだ。

だけど僕は、いつも食べるチキンとアボガトのサンドイッチと同じくらい、凜花が歌うクラプトンの曲が大好きだった。

「ジュン、リクエストある？」

「んーそうだな、じゃあクラプトンがいいな」

心の中では決まっていたけれど、少し悩んだように言った。

「うん、分かった!じゃあクラプトンのいつもの曲ね!楽しみに待っててね」

そう言って、後ろを振り向き、まるで子供が欲しかったオモチャを買ってもらったかのように飛び跳ねながら、キッチンの方へ向かって歩いて行った。

彼女の後姿を見ながら、その喜びが、僕が来ることなのか、純粹に歌が歌えることなのかは分からなかった。

ただ、彼女の幸せそうな姿を見ていると、僕もとても幸せな気持ちにさせてくれて、病気の事も忘れさせてくれた。

僕がなにかの病気である事に関して知っている人は数多くはいない。病気自体の原因やこれからの症状経過も医師ですら分からない。

いわゆる難病なんだけれど、現在の日本ではこの病気は僕しかおらず、過去にも一人しかいない。

外国で似たような症例があることはあるが名前すら付いてなく、医師間での情報すら入手するのは難しいらしい。

発症したのは2年前の桜の花びらが顔を出し始めたこのくらいの時期だった。

頭痛がひどく、どことなく風邪っぽい。

初めは、とうとう自分にも花粉症が出たのかと思った。

花粉症は突然前触れもなく現れて、症状もさまざまであることを凛花から聞いてたし、現に目の前で苦しんでいる人達をたくさん知っていた。

かかりつけの耳鼻科には行ってみたが花粉症の特徴はなく、医師も困っていたが、一応頭痛があるということで、紹介された鎌倉市内の総合病院で検査を受けることになった。

正直、たいしたことはないと簡単に思っていた。

そして検査自体もスムーズに行われ、後日、検査結果を聞きに来てくださいという事だった。

再び病院に行く日、多少の頭痛はあったものの、問題なく午前中には自分の車で病院へ向かった。

担当医師の部屋に入ると、医師の顔つきは前のものとは少し違っていて、やや目つきが鋭い印象だ。

「この間にご苦勞様でした。検査結果をお話する前にちょっとお聞きしたいことがあるのですが・・・よろしいですか？」

「はい」

僕自身も少し緊張した顔つきになっていたと思う。

「佐伯亜希子さんはあなたのお母様ですか？」

ビックリした。考えもしない答えが担当医師から返ってきたのだ。佐伯というのは母親の旧姓で結婚してからは水城亜希子になっているし、当然その連なりで記憶している。だからなおさら戸惑ったのだ・・・。

「え？は、はい」

「亡くなられたお母様のご病気はご存知ですか？」

「詳しくは・・・ただ非常に珍しい病気だったと父から聞かされたのを覚えています」

母は僕が2才の時に亡くなった。

2才ということは僕の中に母の記憶はない・・・。

父から聞かされた少しの情報と、1枚しかない僕が生まれた直後に撮ったと思われる家族写真だけが母のすべてだった。

母親について知りたい時期やもちろん合いたい時や、周りの友達の母親話が辛いこともあった。

だが、僕の身の回りを手伝ってくれる御手伝いさんや、おじいちゃんおばあちゃんが常に僕の側にいてくれた事や、父親の仕事関係のお陰で、少しでも母への寂しさを紛らわしてくれたのだと思う。

「そ、そうですか・・・」

医師はなにから話せばいいか、戸惑っている様子が僕には分かった。なのでこちらから思い切って切り出した。

「先生、母の病気というのは僕と関係するんですか？」

「それなんですが・・・まず、お母様の事ついて話をしたいと思います。お母様の病気自体、今現在でもあまり分かってはおりません。ただ、その病気自体は医者の間では有名で、当時東京の広尾にある大学病院でお母様は診察されています。実は私もその大学病院を出ておりまして、当時はまだ研修医でした。しかし、とても珍しい症例だったので、実際、授業の中にも出てきましたし、はっきりと覚えています」

僕は一点を見詰め真剣に聞き入った。

「それで大学の方に問い合わせ、関係者からの話とその時のカルテを拝見させていただきました。当時お母様は旧姓でしたので、まだ結婚はされていなかったでしょう。しかし、途中で妊娠されました。出産に関しては脳との関係は薄いものと判断し、産婦人科と連携して無事に出産しました。もちろんリスクもありましたし、なにより母体の体力を婦人科の先生が心配して、お母様とお話させていただいたそうです。お母様は子供を産むことを一番の優先事項とし、お父様もそのことに強く同感されています。」

僕の知らないことが今、この状況で聞かされるとは想像もしなかった。

今の話からすると、母と父は病気を抱えながらも結びついたこととなる。

それが僕を産むためのものだったのかは定かではないが、どっちにしろ両親の相当の覚悟を持って生まれて来たこととなる。

父は現在も生存しているし、年2回くらいのペースで様子を見にマシヨンに顔を出す。

ちよつとは有名な画家で、鎌倉とパリにアトリエを持っているが、大半はパリに行ってはセーヌ川や南フランスや近隣国を車で回って絵を描いている。

日本は売り場であり、書き溜めては年2回のペースで帰ってくる。僕も小学生くらいからは学校が休みの度に何度もヨーロッパに連れ

て行かれ、父と男同士での生活を送っていた。

今程裕福ではなかったから、旅をしている期間も短かったし、旅自体も出来るだけお金を掛けずに回った。

ある程度自由に旅が出来るようになったのは僕が中学生の2年か3年生くらいの時だったと思う。

しかし高校生からは安定しない生活環境に嫌気が差し、日本で高校に通いながら一人暮らしをさせてくれと申し出た。

決して旅自体が嫌だったわけではなく、周りの人間と違っていた事に嫌気がさしていたんだと思う。

年齢からいってもそういう時期だったのかもしれない。

画家という職業柄なのか父も自由人みたいなどころがあるから、僕の申し出はすんなり承諾し、今の鎌倉のマンションを提供されたのだ。

父親の名前は多少有名だが、僕の名前は近所にすら知られていないのだ……。

途中医師は僕に背中を向けると何か助手に指示を飛ばしていた。

僕には何も聞こえなかったが、すぐにこちらに椅子を回転させ、続けて話し出した。

「お母様は脳の一部が変形していくというとても珍しいご病気でした。発症からお亡くなりになるまで約5年。あなたを産むまでの3年間は比較的自由に動いていましたし、発言や記憶も問題はなかったと書いてあります。しかし、あなたが1才を迎えたあたりから様子が変わり、動くことも話すことも難しかったようです。」

僕にとっては初めて聞く話ばかりだ。ただただ首を縦に小さく振り、合槌をするしかなかった。

医師の後ろから先ほどの助手が、大きめの封筒の様なものを手渡す。

「本題はあなたの検査結果です……単刀直入に言うと、お母様と非常に似た経過です。これがお母様のレントゲンです」

脳全体のレントゲン一枚と、分割された脳の一部が写ってるレン

トゲンを数枚見せられた。

しかし分割されている方は正直、どこがどの部分なのか分からなかった。

「そしてこれが今回撮らせていただいたあなたの脳です。レントゲンとしての性能は今のの方が数段進歩していますが、一般の方にお見せする写真はほとんど変わりません」

医師はデスクに置いてあるペンを握ると、一点を指した。

「大脳皮質の中の大脳辺縁系に属する海馬という場所です。ここは脳のなかでもとても重要な役割をはたしています。簡単に言うと記憶を司る場所になります。脳の発達というのは個人差がありますが、だいたい二十歳までなのです。そして、俗に言うアルツハイマーは海馬のダメージが原因とされているのです。しかし、お母様やあなたはこの海馬が変形し、ある意味進化をするのです」

確かにその場所だけが、渦を巻いたり、先が尖ったりと歪な形をしていた。

まさか自分の頭の中で、こんな事になっているなんて、中々現実感のない話ではあったが、ついこないだ撮ったレントゲンが僕を現実に戻そうと必死になっていた。

「先程も話した通りこの病気自体は現在詳しくは分かってはおりません。私共もお母様のカルテをベースに経過を見させていたいただきましたと思います。お母様は発病してから約5年でお亡くなりになりました。あなたがこの先どうなるかは正直分かりません。なので2週間に一度、病院に来ていただき検査をしていきたいと思います。」僕は混乱していた・・・病気とは関係なく頭がおかしくなりそうだった。

それから一週間、僕は無気力で部屋にひきこもり、ひたすら気持ちを整理していた。

同じ事を何度も何度も考え、頭の中にある迷路を彷徨い続け、行き着いた先は行き止まりだった。

今思えばそう思う・・・。

第1部

1

レイラで朝食を済ませた後、凜花のライブまでは大分時間があつたので、満開の桜を見に源氏山公園へと向かった。

源氏山公園は桜の名所であり、僕のマンションから30分ほどの距離にある。

今日は調子もいいし、いくぶん体が鈍っていたのでいい運動になると思った。

しかし、行くまでの間、引き帰そうかと何度か思った・・・こんなに体力が落ちていたなんて想像もなかった。

それもそうだ、最近は体調がいい日より悪い日の方が多い。

そんな日は大体はベッドの中にいるか、ソファで本を読んでいる。でも歩いている途中、大きなお寺や、雰囲気の良い裏路地や、こじやれたカフェや、サーフショップなどを通り、カップルやハイキングの集団、外国人観光客とすれ違い、疲れたけれど久しぶりに歩く鎌倉はとても気持ち良かった。

公園に着いた時は3月だというのにもう汗ビツシヨリで、着替えを済ませ、自動販売機で水を買っては一気飲みで飲み干した。

桜は見事に満開で、ピンクや白っぽい色の花びらの真下まで行って、見上げるように眺めた。

春の匂いと、桜の花びらを運ぶ風と、目の前に広がるピンクの景色に時間を忘れ、引き込まれそうになっていた。

その時、「ピピピピ、ピピピピ」携帯がなる。

現実にいきなり戻された。

画面をみると父親からだった。

「ジュンか？調子はどうだ？」

いきなり切り出してきた。僕に掛けてきてジュンか？はないだろうと思った。

「ああ、悪くないよ。特に今日は調子がいいみたい。」

「そうか、よかったな。」

「え？それだけ？」

「それだけはないだろ。心配してんだから」

僕は周りを見渡しベンチを探し、話しながら移動した。

「今どこにいるの？」

「ロシアだよ、サンクトペテルブルグという町に。」

どこだ？さっぱり分からなかったが、父ならどこにしようと思っ
ていない。

「明後日帰るからよ、空港まで迎えに来てくれよ」

「嫌だよ、第一その日が具合いいとも限らないし、そもそもタクシ
ーくらいひろえるだろ？」

「そっか、そうだったな。悪い悪い」

「とにかく、明後日は何時に来るの？」

「たぶん昼から夕方までの間だな、たぶんな」

「いつもこの調子だ・・・画家なんてこんな人間でもなれるのかと
思う。」

逆になかなか目が出ず苦しんでる画家の卵に申し訳ないと思う。

「ああ、分かったよ。家にいるようにするから」

「じゃー明後日なー、バイバイーイ」

・・・

携帯を短パンのポケットにしまうと、ベンチからもう少しだけ桜を
眺め、凜花に作ってもらった弁当を食べてから帰宅した。

少し眠っていたのかもしれない・・・
耳の中、奥深くから鈴の音が聞こえる。

「チャリーン、チャリーン・・・チャリーン、チャリーン」

それは浅い眠りと入り混じりなんとも不思議な錯覚のように、頭の中にこだまする。

一定のリズムで乱れはなく、気持ちが落ち着く。

まるで見渡す限りの草原の上に寝そべって、爽やかな風を全身で感じ、森の妖精達が僕の苦い思いや、体の悪い所を隅々まで取り除いているようだ。

その楽園にいつまでも浸っていたいと思った。

しかし、鈴の音はしばらくは続かなかった。

また視界が暗闇になり、無音になったその時だった。

体の中から僕のすべてが抜け出していく。

じわりじわりと・・・そしてある程度抜けるとそこからは一瞬に僕は空中に浮かび、自分の部屋に浮かんでいる。

体がすごく軽く空気みたいだ。

下を見ると自分が寝ていて、読みかけの本も目に入る。

不思議な気分だ・・・けれど、先程と同じようにすごく気分がいい。ふと手を見ると手首に誰かの手が？まっている。

誰の手だろうなんてまったく気にしなく、ごく自然のように感じる。街に人が歩き、車やバイクとすれ違い、顔見知りの人と軽く挨拶を交わすように、ごく自然だ。

その間も僕は浮いていて、すごく気持ちが良く、病気の痛みや精神的な痛みが、まるでウソかのように消え去っている感じた。

部屋を一周見渡す・・・窓を見付け、とにかく外に出ようと思った。窓は閉まっていたが通り抜けて外に出た。

それもまた自然だ。

目の前には海が広がっている。

サーファーも波に乗って楽しそうだ。

博之さんもいた、僕はまだ海に入ってるんだと思った。

真下はもう海だ。

海面から20メートルくらいの所に僕はいて、もちろん浮いている。

10分くらいたっただろうか・・・体内時計が知らせてくれた。
手首からゆっくりと力が抜けていき、僕の手首を？んでいた手が離れていく。

完全に離れたその瞬間にはベッドの中にいて、目覚めていた。

僕は目を真ん円に開けて、天井を見つめていた・・・。

なんだったんだろう・・・この夢は。

ベッドから起き上がり、しばらく呆然としていたが、ふと時計を見ると午後5時15分辺りを指していた。

ヤバイ・・・凜花との約束がある。

少しの眠りと思っていたが、意外にも3時間くらい寝ていたみたいだ。

お気に入りのチェックのシャツにブルージーンズを取り、着替えを済まし、もう一度鏡の前で髪をセットし直す。

急いでマンションの駐車場まで行き、車に乗り込み、部屋から持ってきた炭酸水を一口飲む。

カーステレオでジャックジョンソンの曲を流しながら、窓を半分まで開け、134号線を葉山方面へ向かった。

車の中ではさっき見た夢の事をずっと考えていた。

普通、夢というのは忘れてしまう事がほとんどなのだが、いつもの夢とは少し違って、色がはっきりしていて、とても鮮明に記憶している。

ごく自然に翼を羽ばたかせた鳥のように、空中を飛んでいた。

もう一人の自分を真上から見ていて、読みかけの本がそこにはあった。

確かに、眠る前に読んでいた本に違いなかった。

夢の中で僕は意思を持っていて、選択肢があった。

もし、海じゃなくても違う場所にも行けたんではないだろうか？

空を飛び、物質を通り抜けた感覚はなんだったんだろう？

そして、夢の中で僕の腕を？んでいた手は誰だろうか？

しかし答えは返らない。

ひたすら同じ事を繰り返し考え、もちろん結論には至らなかった。

午後6時少し前にライブハウスに着くと結構たくさんの人が集まっていた。

元々大きな箱だから、たくさんといってもだいたい40人くらいだろうか。

葉山の御用邸の近く、海沿いにブルックリンはある。

入り口の前にはデッキがあり、2つテーブルがあり、海を眺められるようになってる。

建物も木造の平屋で、レイラ同様ボロボロアンティークな作りだが、白く塗られた木の壁と、梁がむき出しの高い天井にシーリングファンが2つ、薄暗いカウンターには所狭しとお酒が並び、ステージにはいろんな音響や、照明があって雰囲気抜群だ。

音楽を聴きに来た人たちは基本的にはスタンディングだが、テーブル席もいくつかあった。

凛花が事前にテーブル席を取ってくれていたみたいで、僕はそこに通された。

今はお酒も1、2杯しか飲めないなので、少し申し訳ないながら席に腰掛けた。

店員にギネスを注文し、ライブのパンフレットに目を通した。

3バンド出るが、凛花の出番は一番最初で、ソロは彼女だけらしい。5曲のメニューが載っていて、どれも僕の好きな曲だったが、約束通り最後の曲がクラプトンの『いとしのレイラ』だった。

体力的にも最初で助かるなと思いつながら、ギネスに手をやった。

その瞬間、突然前触れもなく音楽が鳴って、ステージの照明が緑の

光を放った。

直に凜花が登場した。

レイラにいる彼女とは違い、ウェーブの髪を下ろし、化粧をして、クラシックギターを抱えていた。

変わらないのはワンピースくらいで、ステージにいる彼女は改めて見ても本当に綺麗だ。

お客もみんな凜花の美しさに見とれているようだった。

僕は不思議にそんな人達を見てジェラシーに似た感じを覚えた。

比較的凜花はバラードを得意としているが、オープニングということもあって、最初の曲はポップな明るい選曲だった。

その後は徐々にバラードに移行して行き、古い木のライブハウスに響く声はお客の心を？んで行った。

マドンナやシンディ・ローパー、ジャネット・ジャクソン、ステイ・ヴィー・ワンダーなど80年代を代表する歌手の名曲ばかりだ。

最後の曲の前に凜花がギターを置いて話し出した。

「みなさん、こんばんわ。ブルックリンへようこそ！今日は思いつきり楽しんでいって下さい！」

拍手が起こる。

「私はもう最後の曲になりますが、曲の前にどうしても伝えたい事があります！」

客がすこしざわめき、僕は突然なにを言い出すのかと思ったが凜花の歌っている時とは別の真剣な表情に気がついた。

今まで何度も凜花のライブに行っていたが、マイクパフォーマンスはあまり聞いたことがない。

本人からも苦手だと言う事を聞いていたから、驚いた。

少し俯き加減にマイクを持ち、ステージの真ん中で佇み、そして一息つき、話し出した。

「私の大切な人が、訳の分からない病気に悩まされています。その人とはもう20年以上一緒にいるけれど、これから先もずっとずっと一緒にいたいんです。悪い病気にその人を持っていかれるなんて

嫌なんです。これから歌う歌はその人がリクエストした曲です。どうか、どうか、みなさんも力を貸してください！どうか、どうか、病気がなくなる事を一緒に祈ってください！お願いします！」客席からはなんともいえない感情が渦を巻き、それが観客に一体感を与え、拍手が沸き起こった。

そして、曲が始まった。

これまで以上に客席は盛り上がった。そんな中、僕は涙が溢れていた。もうステージにいる凛花がみえなくなるくらいに・・・みんなにばれない様に下を向いて大粒の涙を惜しげもなく流し、『いとしのレイラ』が終わるまで泣き続けた。

僕がリクエストした曲なのに、ほとんど耳に伝わらない。曲が終わると、小さな店が再び拍手と励ましの声でいっぱいになり、ぼくはその中で一人、嬉泣きをしていた。

次のバンドがステージに上がるのと同時に僕は席を立ち、ライブハウスを出る。

心臓がまだ早い鼓動を打っていた。

もう涙は止まっていたが、目に溜まった涙が、夜の海を一層に輝かせている。

その時背後から「どうだった？ビックリしたでしょ？」

歌い終わったばかりの凛花の声だった。

僕は振り返った。

片手にはペットボトルの水を持って、汗で肌が光っている凛花が見える。

彼女の顔を見るなり、僕は思いっきり抱きしめて、キスをした気持ちになったが、もちろんそんな事はできやしない。

「ビックリしたじゃねーよ、いきなりあんな事言い出すからすごい恥ずかしかったんだぞ」

「恥ずかしいって・・・別にジュンの名前出してないし、ジュンの

事を言っただとは限らないでしょ？」

笑みを浮かべ、意地悪に言った。

「ああ、そうですか。勘違いならそれでいいや」

「そうそう、ジュンの勘違いだよ」

その瞬間に凜花の顔が目の前にあって、抱きしめられ、キスしていた。

お互いに無言でしばらく唇を離さなかった。

彼女の唇はさっき聞いたばかりのバラードのように柔らかく、優しくかった。

この時、僕の気持ちが変われた瞬間だった。

僕は20年以上の間、一度もお互いの気持ちを言わなかったし、正直、凜花の気持ちに僕と同じものだという確信もなかった。

だから、再び乾いたばかりの涙腺から涙が零れ落ちる。

3月の夜はまだまだ肌寒く、海風が潮の匂いを運ぶ中、僕と凜花は抱きしめあい、お互いの気持ちを体温で伝え、温め合った。

第2部

2

ライブの日からは2日間経っていた。

今日もまずまずの体調だ。

目覚めに窓を開けると、完全に冬を越した暖かい空気が入って来る。今日は父親が帰ってくるので、午前中はレイラには行かず、布団を干し、部屋の掃除をした。

ライブ以来、凛花とは会ってはいないが、昨日少しだけ電話で話した。

凛花は相変わらず、僕の体調を気遣ってくれていた。

僕をライブに呼んだ事で、もしも体調が悪くなっていたらどうしようと思っていたみたいだ。

確かに、次の日はあまり体調はよくなかったけれど、決して彼女のせいではなかった。

凛花が愛おしく、大切な存在であることを実感し、すぐにでも会いに行つて、顔を見たかったけれど、僕は気持ちを悟られないように話した。

僕からは気持ちは伝えられない・・・僕にはその資格がないのだから。

抱き合ったあの日からでもそう思う。

後どれくらい生きられるのだろうか？

すべてが何もなかった事になればどれだけ幸せだろうか・・・。

そんな事を考える様になったのは事実だ。

午後2時過ぎ、部屋のチャイムが鳴った。

玄関ドアを開けると、カジュアルなジャケットに、ジーパン、見慣

れた髭面でほとんど白髪になった短髪が目に入る。

「ただいま、ジュン。」

「お帰り」

お決まりな挨拶を交わす。

「いやいや疲れたよ、まったく。ヨーロッパからの飛行機はいつになっても慣れないね、うんざりだ。ジュン、これ御土産」
なにやら怪しい箱を手渡してきた。

「なにこれ？ 気持ち悪い箱だな、空けていい？」

ドクロのリアルなデザインが箱全体に描かれている。

リアルすぎて気持ちが悪い・・・。

中身を取り出すと、箱に描かれているドクロそのままのブリーフパンツが、2枚赤と黒の色違いで入っていた。

「なにこれ、真面目に？」

「マジだよ、カッコイイだろ！ ちなみに俺とお揃いだぞ！」

チラッとズボンを下げながら見せてくる。

「マジか・・・」 若干、気が滅入った。

「おいおい、ウソだろ！ カッコイイだろ、これ！ ほら喜べ、喜べ！
こんなの日本じゃ売ってないぞ！ なんなら、今、穿き替えてみる！
フィット感もすごいんだぞ、これ！」

こんなイカレタパンツ誰も買わないから売ってないんだと思った。

「分かった分かった、ありがとう。大事な時に取って置くよ」

これ以上不満を言っても終わらなそうなので、心にもないことを言
って区切った。

「そういえば父さん、お昼は食べたの？」

「いやまだ食ってない・・・空港から真っ先に帰ってきたからな。
久しぶりにちゃんとした和食でも食べたいな。ジュン、外行くか？」

「そうだね、僕もお腹減ってるんだ。外で食べよう」

そう言って僕等は車に乗り込んだ。

車で10分くらいにある、蕎麦屋に向かう。

『風丸』ここは父親がよく好んで行く店だが、確かに手打ちの蕎麦や、酒のつまみになりそうなおかずが充実していて何を食べても美味しかった。

僕も何度か来た事はあるが、焼酎や日本酒などの酒は好きではないので大抵は父親と一緒にの時にしか来ない。

店内はいたってどこにでもある蕎麦屋だが、変わってるといえば、こここのオーナーもサーフィンをするって事だ。

だから店内の壁に観賞用のサーフボードが飾ってある。

はつきり言ってぜんぜん店内の雰囲気とは合っていない。

「おっ、久しぶり！帰ってきてたんだな、久恒！」

「ああ、さっき着いたばかりだよ」

「そうか、どうする？適当に出そうか？」

「ああ、適当に美味しいのちようだい。後、生2つ！」

「ジュンはどうする？」

オーナーが僕に問いかける。

「僕も木村さんに任せます。生1つでいいです、僕は運転だから」
そう言って一番奥にある座敷に通された。

こここのオーナー木村と父は昔からの知り合いらしいが、僕は詳しい経緯は知らなかった。

父はサーフィンはやらないから、風丸に通ってるうちに友達になったのだろうと勝手に解釈していた。

ただ、父を久恒と呼び捨てにする人はあまり知らなかった。

「どうだ、調子は？」

腰を下ろし、おしぼりで顔をもみくしゃに拭きながら父が言った。

「そうだな、良くもなく悪くもなくだよ。まあ、少しずつだけれど悪くはなっていると思う」

「明日の検査、俺も一緒に行くからよ！先生にこれだけ世の中進歩してるんだから、どうにかしろって言ってやるよ。俺の絵を懷に忍ばせてやって、これ売ればいい金になるから、どうにかしろって」

「やめてくれ・・・」

「車の方はどうだ？」

「仕事の事？まあ、ありがたい事にゆっくりやらせてもらってるよ。順調だよ」

「この間出た、シトロエンの最新作。パリのモーターショーで見たよ。デザインは最高だ！さすが俺の息子だな。ただ、エンジンが悪いやなあ。いまだに4速オートマはないだろ・・・まあ、デザイン買いでも損はしねーな」

僕は病気になる前から、デザインの仕事をしていた。

小さい頃から外国にいく機会に恵まれ、色々な車を目にすることができたお陰で、自然と感覚が人より優れていたのかもしれない。

だから大学を卒業してから、車のデザインをする事務所に勤め6年間勤めた後、フランスの自動車メーカーシトロエンから誘われた。

当初は日本車のデザインをする会社だったが、ある程度自分の責任でやらせてもらえるようになった頃には、うんざりしていた。

日本というのは枠をはみ出た物は蹴落とされる仕組みになっている。一線を越えないレベルで新しさを求めるのだ。

はっきり言って、僕にはその一線がどのレベルなのかは分からなかった。

そして、車というのはデザインプラス、車の性能も大きく関わる物だと僕は思っているが、日本車は中身は一緒にデザインだけを変えては新製品なんですっていつている。

それはデザイナー云々の前に、一人の車好きな男から見ても、納得がいかないのだ。

ただ、それを抜きに考えることが出来れば、車をデザインすると言う事は本当に僕の性に合っている。

父親と会う度に色々僕が愚痴をこぼすものだから、最初にいた会社を辞めた時、フランスに紹介してくれたのは父親だった。

シトロエンというフランス自動車メーカーの会社に入ってから、そういったストレスがなく自分の本当の感性を出す事が出来た。

というのは単純に一線がなかったのだ。

だからこそ賞賛されるようなデザインをいくつか世に出す事ができたのだ。

どんなに奇抜で突拍子のないデザインでも、尊重し、最後まで僕の言葉を聞いた上で良し悪しの反応が返って来るのだからそれは面白い。

もしかしたら父親はそこまで見抜いて紹介してくれたのかもしれないとその時は思ったが、普段のお気楽な父親を見ているとそれはないなと実感した。

コネにまみれたスピード出世なのだが、もしかしたら父親譲りの才能があったのかもしれない。

それだけは確信が持てる。
病気が発覚してからは、自宅で自分のペースでやらせてもらってる。前々から自宅に籠ってパソコンと睨めっこしていたので、環境の変化は少なく済んだ。

まあ、金銭的に少し余裕があるからなのかもしれないが、本当に今思えば、ありがたい事だ。

大学生くらいのアルバイトの女の子が、丁寧に飲み物といくつか料理が乗ったお皿を運んで来た。

僕等は改めて、生ビールとウーロン茶で久しぶりの再開に乾杯をする。

お互いに一口、喉に流し込むと、少し落ち着いた。

しかし父親が減多に見ない真剣な顔つきになっている様子が見えた。

「今回の旅で数枚いい絵が書けたよ。そして今回の旅で気づいたことがあってな。それをお前に伝えたくて、真っ先に鎌倉へ帰って来たんだ」

「どうしたの？真面目な顔して珍しいね」

「まあ、聞いてくれ。俺は1枚、どうしても書きたい絵があるんだ。今回書いた絵は来週には売れちまうだろう。そしたら後1年、フランスへ行って最後の絵を書くつもりだ」

「え？最後？」

「ああ。最後だ。ジュンが病気と分かってから、母さんの病についてジュンに色々話したよな」

「覚えているよ。あの時ははじめて聞く話だったから辛かった。なにせ僕はお母さんについて、何も知らなかったし、知るのが怖かったから」

「母さんはお前を産む事に関しては、確信を持っていたんだよ。無事に産まれるとね。そしてその事を強く、強く望んだ。しかし俺はお母さんほどは強くなかったんだ。子供を授かっても最悪の場合、俺が一人で育てなきゃいけないんだと思うと自信がなかった。けれど、普段はやさしく、俺のわがままを聞いてるだけの母さんが子供を産むことに関しては自己主張した。母さんが望む深い意味も考えずに。というか俺には分かる訳がなかったんだ」

「亜希子は俺と結ばれた証にとか、自分が生きた証にとか、そんな理由で子供を産もうと思ったわけじゃないんだ。そんなに軽いもんじゃない。分かっていたんだよ、どんな子供が生まれるかを。そして馬鹿な俺には子供が必要で、どうなっていくかをね。お前が亜希子と似た病気が発症したのを聞いた時、耳を疑ったよ。そこからの旅が今までとは変わった物になった。はっきり言って神様を恨んだ。なんで俺からすべてを取っていくんだって。今でも旅の途中で頭がおかしくなる時も少なくないんだ。でも亜希子が言っていた言葉を思い出し、少しずつ理解しようとして努力した。今回の旅で少し分かった気がしたんだ。だから、とりあえず俺は後1年で絵をやめて、鎌倉に帰ってくる。」

「僕にはよく分からない、けれど父さんの思った通りにすればいいさ」

父親はビールを流し込むと話し続けた。

「ジュンが産まれる前の俺は絵のこと、酒のこと、自分の事しか考えられなかったんだよ。絵も売れないし、くすぶってた時期だ。生活

だってまともに食えたもんじゃなかったさ。亜希子はそんな俺に文句も言わず、ただただ笑顔でいた。前にも話したが、ジュンが生まれて少し経った頃かな、亜希子の具合が目に見えて悪くなってきた。お前が産まれてから1年くら経った頃かな。この話は先生にも言っていないが、亜希子が不思議なことを言うようになった」

僕は黙って聞いていた。

「私は今、向こうの世界に行っていたの、やっぱり間違っていないかったわ」ってね。

「あなたには、すべてを受け入れる強さと、経験が必要なの。その経験を与える為に私とあなたの子供は産まれて来たのよ。だからといって私たちを悲しまないで。私たちにもそれが必要な事なんだから」

「俺にはその時意味が分からなかったよ。亜希子が死んで30年やっと分かったんだ、今回の旅で。だから俺はジュンの病気と向き合う事にしたよ」

話し終えた父の顔にはすっきりとした充実感が漂っていた。

僕には少し難しかったけれど、父親の言いたいことは分かった。

それと同時に僕も、自分自身の病気について、少し臆病だった事を反省した。

その後、今までの空気とは違い、木村さんが僕らの席にやってきて、談笑し、特別だ！と言って自慢の蕎麦を出してくれた。

父親も久しぶりに帰ってきて落ち着いたのか、多少酔ったみたいでお店を出てから、僕がふらつく父の背後から追いかける形で車に乗り込み、「大丈夫？」「大丈夫だ」の繰り返しで帰宅した。

家に着くと、すぐに横になってイビキをかいて寝てしまった。

僕は父親に毛布を掛けて、ソファでしばらく読みかけの本を読んだ。

父親とこうして2人でいると、仕事でヨーロッパを旅していた時を

思い出す。

僕はまだ小さかったけれど、日本とは違う雰囲気と人々の陽気さにすごく惹かれていた。

初めて行ったのはフランスだった。

まだまだその頃の父親は名前も知れてなく、たぶん財布にもそれ程お金も入っていなかったと思う。

街ではよく、男女のカップルが口喧嘩をしていて、男性の方がピントされ、途方に暮れていた。

なぜか、その光景が目には焼きついていて、決まって父親はこう言った。

「フランスの女性は怖いぞ、怒らせたらヤバイから気をつけろ」って。

だから僕は、フランスにいる時は女性に気を使った。

お陰で僕のほったは一度も赤く腫れ上がることはなかった。

基本的の僕等はレンタカーは使わずに、交通機関を利用したり、時には一日中歩き回って、パリの中心やセーヌ川沿いなどを見て回った。

いいポイントに來ると父はバッグから画材道具を取り出しすぐに絵を書き出した。

僕はそんな時は暇なもんだから、だいたい車を観察していた。

日本では見かけないような車がたくさん走っていて、それはそれは楽しかった。

イタリアでもローマやベネチア、ペルージャなどたくさんの街を回った。

イタリアの女性は品が良くとてもセクシーだったけど、どの人も香水が強くて参った。

父も「町行く女性から色んな匂いがするから、街が臭い」と嫌味っぽく言っていたのを思い出す。

僕はベネチアがお気に入り、 「世界中で最も美しい都」と称され

るとおり、本当に綺麗で魅力的な街だった。

ただ、問題だったのは、車が走ってないという事だった。

しかし、一つの島にいる限り迷子にはならなかったから、一人で島を見て回ったり、ゴンドラを橋の上から眺めていた。

サン・マルコ広場とサン・マルコ大聖堂は何度行っても大好きな場所だった。

その他にもたくさんの国や街を2人で回って、建物や、人々を見たり、色んな匂いや空気を味わった。

大体が安いホテルに泊まったが、本当にいい思い出だ。

いつの間にか、僕は読みかけの本を枕元に置いて、父親との思い出にふけていた。

そして、僕もいつの間にか眠りに就いていた・・・。

第3部

3

翌日、僕の調子はあまり良くなかった。

頭痛が少しあって、体がだるい。

しかし、まったく動けないという程ではない。

午後には2週間に一度の検査がある為、病院へ行かないといけないから、それまではゆっくりする事にした。

こういう日も珍しくはないので、大抵は自宅で溜まった本を読み、時には音楽を聴いて過ごす。

今日もレイラには行けないが、朝食は父親が慣れない手つきで用意してくれた。

ハムエッグにコンスूप、しらすのサラダとトーストだ。

特に難しい料理ではないのだが、なにやら四苦八苦していた。

僕は心配になって1度覗きに行ったが、覗かれていることすら気づかないほど夢中だったので、ばれない様に少し笑った。

父親が普段どれだけ外食に頼っているか、すぐに分かる。

しかし、以外にも料理の方は不味くなかった。

作った本人ですら、ちょっと驚いていたので、また2人で笑った。

昨日、風丸から帰って来て2人ともいつの間にか寝てしまったが、夜も父親の方は9時くらいには再びベッドに入っていた。

さすがに長旅で疲れていたのだろう。

僕の方は、寝る前にもう一度、父親の話を考えていたら、中々寝付かず、結局、最後に時計を見たのは午前2時過ぎだった。

朝食を食べ終わると、僕はまた自分のベッドルームに入り、横になっていたが、父親がアトリエとして使っている部屋から、ボタンバ

タンと大きな音が聞こえてくるので、なにやら部屋の荷物を整理しだしているのだと思った。

父は昔から自分の鞆の中と家の管理に関しては徹底して綺麗に保つ。それ以外は人並み以下なのだが・・・。

この海の前のマンションは10年前に父親がアトリエ兼自宅として買った。

当時、僕等は鎌倉でも山側、いわゆるお寺などが点在している地域にある、築60年くらいの日本家屋に住んでいた。

この日本家屋は父親と母親が結婚した時に新しく借りたらしい。

その後、この家で母は亡くなったが、画家として生活が成り立ち、余裕が出てきた時に大家さんに頼んで買い取ったのだ。

観光客や土地勘のない人はとてもじゃないけれど辿り着けるような場所ではなく、山の中の自然に囲まれた場所にあった。

朝になると靄がかかっている、すずめや鶯の鳴き声が響き渡り、森や土の本来の匂いがする家だった。

実は今でもこの家は持っていて、観光シーズンなどで鎌倉に人が多くなると、雑音が耳に入ってくるから、僕はこっちの家に逃げ込む。父親も日本に帰って来た時、何日間かは山の家に一人で帰る。

たぶん父親にとって、どんなに貧しくなろうとも、この家を手放す事はないのだろう・・・唯一母が生きた証なのだから。

山の家は環境上、湿気がすごく、梅雨の時期などにはありとあらゆる物がカビる。

父はあまり日本にいないので、その管理が大変だったみたいで、今のマンションを買った。

もちろん山の家は清掃会社に頼んで、週に1度は入ってもらっているし、業務用の大型除湿機が常にフル活動している。

それ程、山の家を大切に保管しておきたいのだ。

今のマンションは僕が基本的に一人で住んでいるが、3つのベッドルームに30畳のリビングルーム、キッチンにダイニングもそこそこ広くあるから、一人では十分すぎる。

壁には父の絵や僕の好きな車のポスターなどが所狭しと並び、アンティークやミッドセンチュリーの家具が置かれている。

きっと、インテリアデザイナーという肩書きを持った人に見せても、問題がないと自負している。

「昼は食えるか？」

父の声がドアの向こうから聞こえた。

「食欲がないんだ、遠慮しないで父さんだけ食べていいよ」

ベッドの上で、目を閉じたまま言った。

「そうか、一応作っとくから、腹減ったら食べろ」

そう言って、ドアの向こうから気配が消えた。

体調自体は安定してきたので、ベッドから起き上がり、読みかけの小説を読んだ。

しばらくすると、僕の部屋の中に甘いて香ばしい香りだけが入ってきた。

午後2時過ぎそろそろ病院へ向かう時間だ。

僕はベッドから起きて簡単に用意を済ませ、タクシーを呼んだ。

体調の悪い日、車の運転は控えている。

今日は父親も一緒に行くと言っていたので、2人でタクシーに乗り込んだ。

病院へ向かう途中、レイラの前を通ったが、凛花の姿は見えない。窓の外を眺めていると、この間まで満開だった桜の木が、少しずつピンクの色を失っていた。

あの花びら達は3週間の短い命を全うし、納得した上で散っていくのだろうか。

短い間でも人を感動させ、時には卒業や出会いといった場面を盛り上げ、気持ちを安らいでくれる桜の花びら達はすべて、人に尽くしているように見えた。

本当にそれで納得しているのだろうか？

そんな事を考えていたら無性に寂しい気持ちになった。

病院に着くと、慣れた通路を受付まで真っ直ぐに向かった。

受付にいる女性とはもう顔見知りで、軽い挨拶の後、少し雑談を交わすのがお決まりだ。

ほとんどが天気だとか、病院の混み具合だとか内容のないどうでもいい話だったが、今日は父親が一緒だから、もう少しだけ話が盛り上がる。

検査自体は血液を採り、頭のCTとレントゲンを撮るだけの簡単なものだ。

それだけなら1時間もあれば終わってしまう。

しかしそこから担当医の部屋に呼ばれ、検査結果や日常生活の事などを話し合うのだが、そこにいくまでの待ち時間が異常に長い。

僕は毎回、本を持って行き、だいたい300ページくらいは読んでしまう。

レントゲン以外の検査結果はすぐにでないので、前回の結果をその時に知ることが出来る。

今回も検査はスムーズに終わり、担当医の部屋の前で順番を待った。

僕はいつも通り本を読んでいたが、父は雑誌やら共同テレビやらを見ていて、飽きると何処かへ行ってはまた戻って来る。その繰り返しをしていた。

「少し、落ち着いて座っていなよ」

「こういう所は慣れないから・・・普段気ままに動いてるから、座ってらんないんだよ」

そう言うってはまた雑誌を手にとっては、落ち着きのない手付きでページをめくっていた。

そんな父親の横顔を見ると、なぜか強張った表情がうかがえた。

その時は、これから起きる父親の行動を予感することは出来なかった・・・。

元々、落ち着きがなかったし、病院といった所に縁がなかったので、本当に緊張しているのだと軽く考えていた。

そんなことをしている間にアナウンスで僕の名前が呼ばれた。

いくつかある部屋の中で2と書かれた部屋へ父親と入る。

挨拶を交わすと医師が言った。

「今日はお父さんも一緒なんですね」

「先生、息子が一人で寂しいから、どうしても着いてきてくれって」

「はあ？ どうでもいいウソをつくなよ」

「悪い悪い、本当はハンサムな先生をたまには見たくてね」

「気持ち悪い・・・黙って座ってなよ」

医師はクスクスと笑っていた。

「とりあえず、前回の検査結果からお話しましょう」

今日撮ったレントゲンをシャウカステンにセットし、前回の検査書類を何枚か手に持つ。

「正直言いまして、状態は少しずつではありますが進行しています。海馬も毎回見るたびに、形を変えているようです」

レントゲンの一部分を指す。

別名たつのおとしごとと呼ばれる海馬の形が、さらに突起が激しくなっていて、宇宙から来た謎の生命体のような何ともいえない形をしていた。

「形状変化が激しい時に頭痛が起こると思われれます。この状態から肥大して行き、破裂してしまうととても危険なのですが、そこまでの変化は見当たりません。最近、体調や記憶に関して変わったことはありませんか？」

「ええ、いつもと変わりません。体調は良かったり悪かったりの繰り返しですが、記憶に関しては問題はないです。子供の頃、僕の髪型をからかった奴の名前もはつきり覚えてますし」

医師の表情が少し緩む。

だがこの間見た変な夢については、病院に来る前から、今の段階で

は話すのは止めておこうと思っていた。
違った意味で頭がおかしいと思われる。
だから父親にも話してはいない。

「血液検査は特に目立つ異常はありませんでしたので、今日の所はこれで大丈夫です」
すんなり終わった。

大体何もしなければこの程度で終わるのだが、待ち時間との比重が合っていないような感じをいつも覚える。
すると黙って聞いていた父親が口にする。

「先生、ちよつと2人で話をしたいのですが、10分くらいお時間もらえませんか？」

「・・・構いませよ。それでは、このままお話ししましょう」
父親が僕を見る。

僕は煮え切らない表情を表に出し、今更僕に隠して話すことなんてないだろうと思ったが、しかたなく部屋を出た。

医師と2人きりになると、父親の表情はさらに強張っていた。

「先生、この前電話で話した件は考え直してくれましたか？」

「いや、それは無理だと言ったでしょう」

「それは何度も聞きました。けど先生にだから無理は承知でお願いしてるんですよ」

「無理というのは、私だから無理なんではなくて、今の医療では誰もできないという意味です」

「先生、あんた少しは有名な医者なんだろう、無理無理言っていないで少しは考えてくれよ」

「城木さん、以前電話で話した通り脳の移植というのは、神経幹細胞を成熟した脳内に移植し、生着させ環境の変化に適合した脳組織を作り出し、損傷した機能の回復を・・・」

話しの途中で父親が割り込んだ。

「難しい話は俺には分からねーよ、ただ単純に俺の脳とあいつの脳

を取り替えてくれればいいんだ」

「いや、だから・・・今現在の医療ではあくまでも実験段階で、どうしようもないのが現状なんです」

「亜希子が死んでから30年経ってんだぞ。それなのに未だにそんな単純な事もできねーのか？」

だんだん口調が荒くなってくる。

「単純じゃないんですよ。落ち着いて下さい」

「俺は落ち着いてるよ、あんたが出来ねーって言うからだ」

「そもそも、もし出来たとしてもあなたの息子さんが了解しないでしょう」

「そんな事あんたに言われたくねーよ！こっちはいくらでも金は払うっていつてんだろ。」

「いや、お金をいくら積まれてもできないものはできません」

「なんだと！お前、ジュンが死んだら責任取れるのかよ！訳の分からねー病気に息子までもが取られちゃうんだ、お前にその気持ちが分かるのか？」

その時だった。激しくドアが開くと同時に怒鳴り声が飛ぶ。

「父さん、何やってんだ！」

「ジュン・・・」

「あんた自分が言ってることが分かってんのか？恥ずかしいと思わないのかよ」

「お前聞いてたのか？」

「聞きたくなかったって、そんな大きな声だしてれば、外に聞こえるよ。自分勝手なことベラベラしゃべりやがって」

僕は普段大きな声を出すのは滅多にないので、父親は唾然とした表情で見ている。

自分でも怒鳴る事に慣れていないので、声の強弱が分からなくなり足が小刻みに震えていたが、怒りは収まらなかった。

「昨日自分で言ってる事は何だったんだよ。今回の旅でわかった！って。何が分かったんだんだよ。自分の脳を僕に移し変えれば解決す

るって事が分かったのか？そんなんじゃ何も解決しないんだよ！」
父親はまだ黙って僕を見ていたが、医師は椅子を回転させデスクに向き直り、手持ち無沙汰なので書類を整理しだした。

「僕だってどうしようもなくなる時はあるさ、頭では分かっているもね。何かに怒りをぶつけたりしたくもなる。でも、何かに怒りをぶつけても何も変わらないんだよ！あんたは父親のくせに何も分かってないじゃないか！」

僕を見ていた父親の顔が傾き、目線が合わなくなる。

「何か言えよ！黙ってたんじゃ分からないだろ！」

しばらく無言の状態が続くと、部屋の中には僕の荒い息遣いだけが聞こえた。

父親の項垂れた姿を見ていたら、普段と違ってすごく小さく見える。僕は少しずつ落ち着きを取り戻し、普段と変わりのないトーンで話し始めた。

「父さん、僕はまだ生きてるんだよ。この先何年生きるか分からないけど、死ぬ事を考えるより、今を生きる事を精一杯考えようよ。最近僕はある人の歌を聴いてそう思ったんだ。でもその人の事を考えれば考えるほど僕はどうしていいか分からなくなる。この世からいなくなる事が恐くなるんだ。矛盾してるけれど、一生懸命考えたんだ。それが今を生きるって事だって。先が見えないから、心の中ですごく葛藤するんだよ、病気の事や恋愛の事を。自分に正直になれとか言う人もいるけど、人間なんてそんな単純なものじゃないんだ、きつと。正直になれないから悩んだり、苦しんだりするんだと思う。それが今を生きる実感なんだってね」

父親の目から降り始めの雨のような水滴が床に一粒ずつ落ちる。

そして医師の方をゆっくり振り返り、膝を折り、腰を曲げ、手を床につけ、頭を折る。

「先生、申し訳ない」

医師が椅子を元の状態に戻し、父親の元へ近寄る。

「城木さん、顔を上げてください」

父親は反発するかのように頭をさらに深く下げ、「申し訳ない」と、もう一度声を振り絞り言った。

水滴は少しずつ強くなって来た雨のように流れる。

「城木さん、謝る必要なんてないんですよ」

父親は黙ったまま体勢を崩さない。

「私は出来る事は出来ると言うし、出来ない事は出来ないと言います。そして例外を除いて、余命が出た場合本人に隠す事はしません。家族のお願いだとしてもです。それは私の方針であり、譲ることはありません。息子さんがおっしゃった言葉がまさにそうです。例えば患者がいずれ亡くなることを家族だけが分かっていたとしましょう。きっとそのご家族の方は本人には絶対にばれないよう努力するでしょう。そして抱え込むのです。私の経験上、患者がその事を気づかずに亡くなる事はまず無理です。近い内に亡くなる人を目の前にして、ずっと平然としていられる事はとても難しいし、私ども医師も協力し、ウソの説明をしなくてははいけません。そんな悪循環をするよりも、私は今を生きることを強く願います。今を生きるということは短い期間でも、何倍もの生きた実感を感じ、家族全員で分かち合うことができるのです。しかし誰もが現実を受け止められる訳ではありません。以前にもどうしようもない怒りを担当である私にぶつけて来た人はたくさんいます。しかし、それを受け止めるのも医師の役目だと思っています。彼らは決して私が憎いのではないからです。城木さん、だから謝る必要はないんですよ。あなたも、今を生きているのだから」

父親は泣きながら聞いていたが、最後の言葉を聞いた時にはもう土砂降りの雨のような涙を流し崩れていた。

「父さん、帰ろう」

僕は父親の肩に手をやり、もう一度言った。

「父さん、帰ろう」って・・・。

第4部

4

前回の検査の日から5日経った。

あの日以来、僕の気分は梅雨の時期のようにいつまでも晴れ渡らない天気のようなだった。

しかし今日はそんな時期を抜け出した様な気分だ。

もしかしたら台風の目の様に一時的な晴天なのかもしれないが、どっちにしても頭の中のエイリアンだって休まなくてはいけないのだろうと思った。

ここ最近ベッドの中で過ごすことが多く、食欲もなかったので体重も少し減った様子だ。

体は動かなかった分、頭だけは異様に回転した。

ベッドに入りながら、いつその事、脳のオンとオフをスイッチ一つで切り替えられないかと想像したぐらいだ。

もちろんその議題は父親の事だった。

父親があの日、医師に言った言葉と態度が僕には理解できる。

理解の内容をまとめる事は難しかったが、簡単にいうと人間というのはそういうモノなのだ。

風丸で僕に話した事も、医師に放った言葉も真逆に見えるがすべて父親の気持ちを表すものだった。

人間には裏と表がある。

それは2人の自分が背中を向き合わせて立っている様ではなく、真正面を向いた自分の中で、以外にも隣り合っているのだ。

何か問題を抱えた時、人の心の中にはいくつかの選択肢ができ、その時その場面で選択をしなければいけないのだが、混乱するとそ

の場に合った選択を間違えることがある。

ましてや父親の様に得体の知れない病気が妻を奪い、目の前にいる僕にまで牙をむいて襲い掛かっているのだからしょうがない。

あの日、帰りのタクシーの中は終始無言だった。

家に帰ってからはお互いに部屋に入ったつきり次の日まで顔を合わせる事はなかった。

朝になると、父親の姿はなく一枚の書置きだけがテーブルの上に載っていた。

『山の家へ行って来る。明後日には戻る』とだけ書いてあった。

そして2日後に帰って来ると、あの日あった事が嘘かのように、いつもの父親に戻っていたのだった。

正直、僕は少なくとも慰めの言葉を考えていたし、明るく振舞おうと気合を入れていたのに無駄な努力に終り意気消沈した。

次の日には東京のホテルに向かい鎌倉を後にした。

僕が知る父親と、彼の絵を好む愛好家達が知る父親とはギャップがあり、後者から見ると父親は今の時代には数少ない偉大な画家でありダンディーな成功者なのである。

なので、日本にいる時期は多忙であり、帰って来る前からスケジュールが埋め尽くされている。

毎回、皇居近くに位置する日本屈指のホテルを利用する。

僕の知る限りの父親はそんな高級なホテルを利用するなんて、考えられない。

しかし、それは彼の意図とするものではないらしいが、周りにある環境が過大に気を遣っているに違いないと思っている。

旅で描いた作品はいつもホテルに直接送り、そこを拠点にして大手デパートでのイベントや銀座にある画廊へ足を運ぶのだった。

僕はというと、レイラを目指しビーチクルーザーを走らせている。実際に凜花と顔を合わせるのはライブ以来だ。

胸が踊り、無意識にペダルを漕ぐ足が速くなっていた。

ホテルの脇に自転車止め、ロビーを右に折れ、廊下を少し進むといつもの扉が待つ。

一週間しか経っていないのになぜか懐かしく感るが、一度大きく息を吸い込み重厚な扉を勢いよく開けると、そこはいつもと変わらない匂いのする場所だった。

新聞を片手にコーヒーを飲む客が目に入るが、すぐに視線を凜花がいつもいる方へ移す。

「おお！久しぶりだな、ジュン」

僕の間とずれた音が入る。

「・・・久しぶりです・・・」

「どうした？ボケツとした顔して。とのかく座れよ」

「は、はい。」

それは凜花の父親、博之の声だったが、動揺を隠すように僕は窓際のソファへ移動する。

「博之さん、凜花は？」

「凜花？朝からデートに行っちゃったよ」

「・・・え？」

返す言葉が出ない・・・博之は何もなかった様に手を動かしている。その時厨房の中から声が聞こえた。

「ちょっと、お父さん、何言ってるのよ！変な冗談やめて」

「はははは、ごめん、ごめん。いい年した娘がデートにも行かないで家業手伝ってくれてるんだ。一生懸命やってくれるから、俺、暇でボケちゃったかな？」

「余計なお世話。くだらない事言ってるでちゃんと仕事してよね！やる事いくらでもあるんだから！」

そして、僕の方を振り返る。

怒り顔から一転、僕には笑顔を向けた。

「ジュンおはよう！」

僕もできるだけ自然に振る舞い、言葉を返す。

「おはよう、久しぶりだな」

「うん久しぶりだね。久恒さん帰って来てたんだってね？」

「ああ、もう東京へ行っちゃったけど」

「そっか、会いたかったな・・・ところで、どうする？いつもの？」

「悪いね・・・いつものちようだい」

「別に悪くないよ。ジュンが大のアボガド好きなのは知っているし。」

普段と変わらない会話だったけれど、少しテンポが速く、あの日の出来事が片隅に含まれた会話になっていた。

何やらフロントで書き物をしていた博之が弾んだ声を出す。

「ジュン、夕方、波上がるらしいぞ！どうだ？久しぶりに行くか？」

「本当ですか？いや、でも無理ですよ・・・博之さん」

キッチンに入っていた凜花の声が再び店内に響き渡る。

「お父さん、いい加減にして！ジュンに構わないでよ！」

博之は無言で舌を出し、肩を窄める仕草をして再び仕事にもどる。周りの客も自分のペースでコーヒーを飲んでいたり、新聞のページを捲っている。

僕もいつも通り新聞を片手に寛いでいたが、前と同じように何気なく窓の外に目をやった。

前回来た時は満開だった桜がもうほとんど散っている・・・桜は儚い。

なぜ桜を見ると、ネガティブな思いばかり浮かんでしまうのだろう・・・僕だけだろうか？

昔からそんなどうでもいい事を自問自答する癖が僕にはあって、結局答えはいつも出なくて、最後は悶々として終わる。

だから最近は無駄な思想をする前にストップを掛ける事を少しずつ覚えて来た。

「ジュン、今日少し時間もらえないかな？」

コーヒーとサンドイッチをテーブルに置きながら、小さな声で喋り掛ける。

博之には気付かれてていないようだ。

「ああ、大丈夫だよ。待ち合わせは何時くらい？」

僕も凜花負けないくらい小さな声で喋る。

お互いにやっと聞き取れるくらいの微量で・・・

その瞬間「おい！凜花！後は俺がやっとくから、もう上がっていいぞ！」

「・・・え？」

まさに地獄耳だ。

凜花は驚きの表情で博之を見た後、すぐに僕の方も向き少し笑ってから、再び博之を見た。

「お父さんありがとう。じゃー遠慮なく上がりしてもらうね」

「ああ、たまにはデートくらいして来い！」

「そんなじゃないよ！」

凜花は少し顔を赤くして反論していたが、僕の方は2人の会話を聞いてるととても和やかな気持ちになった。

「ジュン、食べたらかき合ってくれる？」

「いいよ、急いで食べるからちょっと待ってて」

「急がなくていいよ。私も準備してくるからゆっくり食べてて」

そう言いながら凜花は自宅として使っている部屋の方へ向かった。

僕は今日レイラに来る時と同じ様に、サンドイッチを口に運ぶピッチが早くなっていたのかもしれない。

そう気づいた時はコーヒーを口にしないで、凜花が出て行った扉を忙しなく見ていた。

しばらくすると、ポニーテールを解き、パーマのかかったロングヘアをダウンスタイルにしている凜花が見えてきた。

目の前に来るといつものワンピースではなく、ジーパンにVネックの黒いセーターそして黒いロングブーツを合わせている。とても大人っぽく、シックで上品な印象を受ける。

「凜花、それじゃー僕の格好とつり合わないよ」

「いいのよ、たまにはいいでしょう？ どう？ 似合ってる？」

「ああ、素敵だよ。とても僕と同じ年とは思えない」

「それどういう意味よ！」

「違う違う！ 大人っぽいという意味だよ。そんな凛花あまり見たことないからさ」

「じゃー普段は子供っぽいってこと？」

僕は困った顔をし、言葉を搜していた。

「冗談よ！ ありがとう、ジュン。さあ行こう！」

僕は立ち上がりながら、きつとこんな時イタリアの男性なら、女性を女王様の様に褒めちぎり、オーバリアクションで愛情表現をするのだろうと思い、日本人に生まれたことを始めて後悔した。

「ジュン、稲村ガ崎まで散歩しない？ どう？ 歩ける？」

「ああ、大丈夫だよ。自転車は置いていくから、ゆっくり歩こう」
そう言って僕等はレイラから海に向かい、海沿いの134号線沿に沿って大体30分くらいの稲村ガ崎へ向かった。

稲村ガ崎は鎌倉随一の富士山のビュースポットであり、海に突き出た丘が公園になっていて、とても素敵な場所だ。

冬の夕方になると、何処からともなくカメラを趣味とする人達が連なって富士山に銃口を向けるようにレンズを置く姿がよく見られる。2人で歩きながら、仕事のことや、歌のこと、親のことなどを話し、時には冗談で笑ったりしてゆっくり歩いた。

いつも目にはしている風景を歩いているだけなのに、凛花がいるその30分が僕にはかけがえのない時間で、本当に幸せな事だった。

まるで合えなかった時間を埋めるように、相手の近況を隅から隅まで盗み合いっこしているようだ。

稲村ガ崎に着くと、自然と富士山が真正面にぼんやり見える芝生に腰を下ろす。

春らしく爽やかで、朧雲が太陽を程よく隠し、風が滲んだ汗を適度に乾かしてくれている。

今までの会話がウソかのように2人は黙り、一点を見つめていた。

時折、僕は凜花の方を向くと、風になびいた髪が一点に集まり、僕側の顔がさらけ出していて、あまりの美しさに見たことを恥ずかしく思った。

海を見下ろすと、10人くらいのサーファーが連なって波待ちをし、一生に一度しかこない波が来ると一斉にその波とじゃれ合っている。周りのものすべてが僕達2人を中心に描かれた一枚の絵の様に感じる。

そして、誰もいない公園であの時のようにもう一度ゆっくりキスをした。

「凜花、僕は君のことが昔から好きだったんだ。けれど臆病だったから、このままでもいいとずっと思っていた。けれど病気になってからもっと臆病になったよ。これからもきつと臆病なままだ」

「ジュン、昔のことはどうでもいいよ。私とあなたでは根本的に考え方が違う所があるの。それは私は病気があなたを奪うなんて信じないという点よ。病気が原因で臆病になるなんてバカみたいじゃない。私はこれからもずっとジュンと一緒に。どう？約束してくれる？」

「ああ、約束するよ」

短い言葉だったけどお互いに十分だった。

そして今度は僕の方から凜花の柔らかい唇にキスをした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7961t/>

旅路

2011年10月9日04時13分発行